

巻頭言

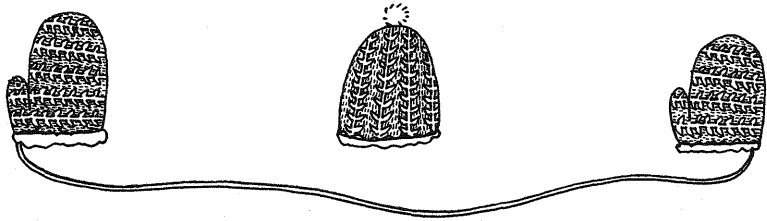
いのちを繋ぐ

— 育ちをみつめて —

土屋 とく

山の春の訪れは遅い。とりわけ今年は、四月の下旬というのに気温は零下を示し、樹々は冬の暗い色のままに静まりかえっていた。白い花を装い、その存在を真っ先に主張する“こぶし”も、それぞれ何輪かが僅かに見られる寂しさであった。そんな日のある朝、
“枯れ木のような”桂“の枝先に何か尖ったものが見え、翌日には小指の爪の形に、次には親指くらいにと拡がりをみせ、僅か週日のうちにはほのかな赤みをさした立派な丸い若葉が揃って繁ったのである。そして、風が渡るたびに鈴を振り響びを互いに言い交わすように細かく打ち震えるのだった。はからずも、この鮮やかな「いのち」の再生を目にしたとき、自然の営みの素晴らしさと伸びる芽の自発的な育ちの見事さに改めて強く感動させられた。

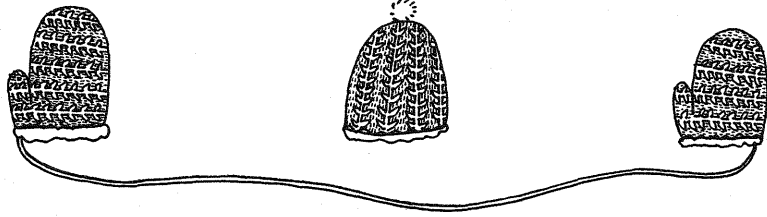
— 生きとし生けるものが、それぞれに与えられている いのち — 宇宙の大きな力の中で



営まれているドラマは、樹木は木の、草花は草花の、動物は動物の、おのおのの定められた時間を最大限に活き、巧みにプログラムされた生活を過ごす。そのただなかでは、特に意識することもなく精力を傾けて日々を重ねているのだろう。そして、やがて老い、次世代へ全てを任せ再び元始へかえっていく。

人もまた、いのちの芽が与えられ、胎内で驚異的で確実な育ちを経て身体的一体から、外界での二者関係となる誕生の日を迎える。「はじめまして 私の赤ちゃん！」それから成長・発達の様々な変化をつぶさに見つめていったとき——親から子へ・子から孫へ——と続いて演じられる舞台の何と不思議で興味に満ちていることだろう。

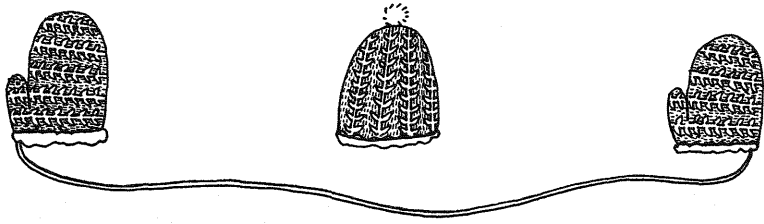
子どもと共に親しく生きる欲びは何物にも代えがたいものである。小さく柔らかくかわいい姿を目にするとき、育てる側はその愛らしさに思わず保護と愛を注がなければいけない心情になる。全身でいのちを託してくる存在を慈しまないではいられないのが親というものなのである。しかし、一方では予想を超えた大変さも共にある。赤ちゃんは生きるための主張である、快・不快・欲求を、総て「泣く」という行為によつてはつきりと示し、周囲の者は否応なく手を下さざるを得ない状況に置かれる。特に、初めて母親になったとき、次から次に出てくる未経験からの数々の困難さに不安は尽きない。子育てには正しい経験に裏打ちされた智慧と、きめこまかい洞察が何よりも必要であり、周囲の人々の温かい支えと援助がなければ、とても日常生活を快く乗り越えることはできない。とりわ



け新しい父親の取るべき態度をはじめ、祖父母その他の温かい協力体制が、乳児期の子どもにとって望ましく嬉しい環境なのであることは、今更強調されるまでもない。

目と目を見合わせ、優しく語りかけ、気持ちを理解して快い状態にしてくれる親。だっこは体温を伝え合い、ゆったりとゆらす動きは胎内での安らかさと同じなのかもしれない。独特の甘酸っぱい匂いをさせて、柔らかく儂いながら、それでいて腕と胸にずっしりと存在を感じさせる赤ちゃん。身をもって交わされる母と子の肌と心のこまやかで濃い接触は、互いに結ばれ紡がれて強い絆となる。この応答しあう交流は両者の間に、いつしか響きあう共鳴を生みだし無意識のうちに確かめられて、「人は信じられるもの」のいのち預けるに足るもの」という信頼関係の基が築かれていくのである。成長してから幼い頃の記憶をしっかりとっている人は殆どいないといつてよい。しかし、記憶に無いということは全く消されて何の痕跡も残さないということではなく、じつと心の奥にひそめられたまま、その人間をどこかで、いつか支配するような結果を生むとしたら……。

このごろ、子どものまなざしが少し変わってきているのではないかと感じることもある。いままでは子どもとフト目が合ったとき、こちらのまなざしに対して親しげな反応を示し、言葉は無くても、快い交歓のひとつときをもつことが多かったように思う。所謂「ひとみしり」からの拒否反応に合うことはあっても、腕をしっかりと母親に抱きつけながら、また、そろそろとこちらを窺っているかわいいくさがあった。しかし最近一部の子ども



の目は、こちらのさりげないまなざしに、疑いのある警戒の色を示し、交流を避けようとする場面に遭遇することがある。考えられないような事件が次々と起こり、人を無条件に信じることの危険が子どもや親をおびやかす社会の変化がそうさせるとはいえ、人間形成の根幹にあるべき信頼関係の確立の時期に、まず人を疑うことを優先させなければならぬのは何としても悲しいことである。また、虐待やネグレクト事件の報道の中に、淋しい幼児体験の世代間連鎖のような背景が見え隠れするのは、より良い育ちを願うのが保育の原点と信じる者にとっては一層つらいことでもある。

勿論、子育てをしつかりしているすてきなお母さんとの出会いもある。いつのまにか、子育ての二極化が徐々に進んでいるのだろうか。

誰もが子どもの幸せを願い、願いは時に祈りに近いものになる。一度しか与えられず、かけがえの無いそれぞれの一生を悔いなく存分に生かすためには、幼いいのちへの慈愛のかけかた如何にかかっている。時代や社会が変わってもこの願いは変わらない筈であるし、変わってはならないものである。

日本の幼稚園教育百三十年を迎える今、いつも一貫して流れてきたものは、子どもの良き育ちを願い祈りをこめて創意工夫をこらし、日々の保育に力を傾けてきた先達の尊い精神であり、この長い道はこれからも尚きり拓かれていく道なのである。

(保育を深めていく会代表)